～猫被り姫に魔王退治の王子様～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～猫被り姫に魔王退治の王子様～

【Ｎコード】
Ｎ６２０８Ｘ

【作者名】
かとう　みき

【あらすじ】
東国の姫が魔王に掠われた。婚約者の王子は姫を救うべく魔王退治の旅に出たが…、魔王は東国を統べる王に外ならず、仕来たりとして形だけの魔王退治の旅なのか、本当に姫を取り返したいのか、最後迄目的に迷う。魔王と姫の両方を救いたいと云う旅の道連れも出来て、王子は姫に恋をしていた自分の気持ちも不安定になる。
（※王子ＢＬ注意、かけらも受け付けない人への警告に過ぎず、お好きな方の場合は期待に応えられません。……が、ゴメンなさい少しだけ不埒な事します…（＜＿＞））

姫我慢してるのに……

※完結予定日：２０１１　１２月中旬…最悪年内ですが多分中旬で平気かと。

◆1話◆猫被り姫（前書き）

この頁を開いて下さり有り難うございます。
最後迄お読み戴けたら嬉しいです。

女神と、魔王?と、剣と魔法

当たり前に出て来ます。
世界が違うので、違う言葉が有ります。
異世界も、神や魔法使いならば跳べてしまうので、
同じ言葉も有ります。

この話の誤字脱字は雰囲気ぶち壊しなので、かなり気をつけてますが……発見しては修正しております。残ってたら……申し訳ございません。

造語をちりばめているので、え?と思われましょうが、作品内にて殆ど説明が入る筈です。
見逃しが有りましたら、完結後のご指摘を戴けますと有り難く存じます。

少しでもお楽しみ戴けましたら幸いです。
正直、カレラの年齢には触れないで下さい……的な……、登場人物率が高いです。
そもそも人間では……等と云い始めたら、話が進みません。
カレラも恋をします。
しかも、うっかり熱烈なのをしたら国を巻き添えです。
一途に熱烈な恋をする魔王を、どうか見守って下さい。

◆1話◆猫被り姫

☆☆☆

何から話そうか？やはり最初は私の国の話をしようか？

絹の国と云う。東の歴史有る国だ。

セリカの名に相応しく、優しく穏やかな空気はまさしく絹の肌触りのようで、季節は常春。過ごしやすく美しい自然。美と香りを楽しませる花を咲かせる木々。その自然の美しさ同様に、雅やかな文化は派手さには欠けるが、歴史に裏打ちされた確かな自負を、貴族だけでなく民が誇るに足るモノだ。

寧ろ華美な南の文化等は軽侮の対象に近い。端的に云うならば、物柔らかに見えて自尊心が高い国民性、とも云える。

歴史と美を誇る国。

セリカの謂れは古く、もはや確かな伝承も失われて久しいが、春の女神アランナが名付けたとも、月の女神リア・リルーラの記憶の泉から生まれた国だとも伝えられている。

だからだろうか？

セリカの王族からは、リアに仕える御司が産まれる事が多い。

しかも。リアたるリア。リアの中のリア。リア・リルーラに。

それがどれ程の光栄か、どれ程の名誉か、そしてどれ程に、人として、普通で居られない事か……勿論、女神には解らないだろうし、

解るつもりもナイとも思う。
女神だから仕方ない。
人に関われば狂うからと、関係せずに居ようとか、そんな思いやりを見せてくれたり…なんて事は、期待してはならないのだ。

女神の栄誉に浴する王家。

私は、その美しいセリカに相応しい、美と知性を誇る姫として育った。
他国にまで聞こえる、セリカの姫の素晴らしさは、私の努力のたまものと云えよう。

☆☆☆

そんな私にも嫁ぐ日が来た。これ以上比ぶべくも無い好条件。西の大国、クルトの第一王子だ。

富める国クルト。それだけでも魅力だが、私の美貌をもってすれば、他にも相手は居る。彼は第一王子であり皇太子でも有る。そして今現在、彼の国に他の王子は居ない。クルトの国は王家の力が絶対的で、財も有り余る程だ。そして親族が少ない事は、対抗出来る程の敵が少なく、財の目減りも少ないと云う事でも有る。

我が国も王家の発言力は強く民もそれなりに豊かだが、王家の財力は些程ない。
貧乏と迄は云わないが、有事の際に困らないとはお世辞にも云えない。

大国クルトの結納金は魅力に満ちて、私の心を彼ノ国に惹きつけた。

☆
☆
☆

◆2話◆花嫁の独り言

☆☆☆

美しい王子の名をヒラリスと云う。妙な名だが、それさえも美しく感じさせる王子の絵姿では有った。例え半分でも、この絵の通りに美しいならば、それなりの愛を育めるだろう。

私はそう思い、この結婚を選択したのだ。

勿論。

私に対する愛は問題ない。他の姫君方とは違い、私の美しさは絵姿に画けるものではないからだ。

時に、絵姿と違うと問題になり、国に帰される姫が居る。誰とは云わないが、南国のさる小国の姫がそうだった。嫁ぎ先の我恵那王子とは夜会でご一緒した事が有るが、その時の彼は大層悔しがって居たと聞く。

彼は、私と彼女の絵姿を比べ見て、彼女に求婚したのだ。

絵より美しい私を知り、絵に遠すぎた彼女を思い出し、彼は上品とは程遠い罵りを口にしたと云う。

けれど、その時には既にヒラリス王子との縁談が進み、彼の力でもどう仕様もなかったのだ。容色のみで女を判断する阿呆に、相応しい結末では無かろうか？

騙される莫迦に居て貰わないと、私の努力の成果が半減するが、ああ迄愚かしい者を見るのもまた不快だ。

勿論、王族に生まれて、容色に興味を持たないのも困りものでは有るし、仕方ないのかも知れないが。
王族にとって、美しさは義務みたいなものだから、当然、縁談の相手にも美貌を要求される。
美しさは国の象徴に相応しい。窓口にも相応しい。
崇めて貢がれる存在としても相応しい。
尊敬する言動も、美しいなら尚更有り難く感じてくれるモノなのだ。王族は美しく在らねばならない。

容姿も、行動も。

美は力だ。神に列なるチカラ以外にも、やはりある種の力を持つ。人間のそれは、多少即物的ではあるけれど。

私の美しさもヒラリス様の美しさも、そう云う意味では非常に役に立つ代物だ。
セリカにとっても、クルトにとっても、喜ばしいこの婚礼は、調度十日前に挙げられる筈だった。

筈、と云う言葉からも解る様に、未だ式は挙げられていない。何故かと云えば、花嫁たる私が盗まれたからである。

十五日前の私は「明日はヒラリス様にお逢い出来る」と心弾ませて居たところを、悪い魔法使いに掠われたのだ。

冗談みたいな話だが。　笑い事ではない、私にとっては、最大の悲劇で有る。

と、思ったら「悪い魔法使い」はヒラリス様の絵姿よりも余程美

しい男で、私は少し気を良くした。

「貴女を誰にも渡したくなかったのです。」

愛を打ち明ける彼の言葉も、心地良かった。だが、しかし、どんな甘い声も美貌も、所詮ヒラリス様のもたらす財力には及ばない。

私が、セリカの姫として、誇り高く貞節に努めたのは云う迄もない事だろう。

☆☆☆

◆3話◆出発

☆☆☆

此処は西の大国クルト。

国王夫妻が表情を固くして、心配を隠せない様子だ。

「まだか！？」

青い顔で、王が声を荒げる等、滅多に有る事では無い。だが今の王は、傍らの王妃が今にも倒れそうな様子にも頓着出来ないで居る。何故なら、待ち詫びた王子の花嫁が、国境を前にして掠われてしまったからだ。

彼等はセリカの姫の行方に関する報告をずっと待っていたのだ。

魔女や兵士を始めとして、ありとあらゆる人々が、ありとあらゆる方法で、姫を探索していた。

そして、その指揮をとるのは、嫁盗人の被害者たるヒラリス王子であった。

「父上、余り周りの者に当たらないで下さい。」

クルトの唯一の王子にして神々に愛されたヒラリス王子だ。

「ヒラリスか…どうだ？何か解ったか！？」

気難しい王の表情を和ませたのは、何も王子が唯一人の息子だからだけではない。

ヒラリス王子ならば何とかすると信じればこそである。

クルトの民は知る。王子はあらゆる神の寵愛を得ていると。
美と芸術の神、知の神、武の神にも愛され、剣の技は天才の名を欲しいままにしている。

どこの国より富み、どこの国より強く、民も豊かで幸福に暮らして居るが、人はそれだけでは満足出来ない。
クルトが何より望むモノ。
それは歴史、文化、芸術、はっきりと言葉や形に表すのが難しい、美の中に有る。
文化的でないとは云わない。クルトの民自身思ったりはしない。
けれど、芸術を誇る国を、歴史の深い国を、どこか羨まずにはいられない、それがクルトの国民性なのだ。
文化も芸術も何処か借り物に等しいこの現状こそが、クルトの悩みだと云っても良い。

美と芸術の国セリカの姫を娶る事で、その不満もかなり解消される筈だった。

いや、解消されなければならないのだ。

王はそう思って、王子に尋く。
「何処に居るのだ、姫君は？そして、掠った魔女はどこの者だ？」
王子は応えた。
「東の森の……魔王のようです。」
「黒の王子か！？」
そんなバカな？と、王は激昂し、王妃は意識を手放した。
それだけ手強い敵で有った。
普通なら敵にしてはならない相手でも有る。
黒衣を纏った魔法使い。東の森は魔物さえ近付かない禁断の地だ

った。
行って戻って来れたらそれだけで――目的地に辿り着けず迷い出ただけでも――幸運だと云うくらいの。禁断とは聖地の証でも有り、聖地を破る者が赦されないのは当然とも云える。

だが、例え禁忌を破ろうとも、王族として為すべき行動が有る。だから、王妃は王子がそこに行く姿を想像しただけで気が遠くなったのだ。
「行くのか」
王妃が侍女達に運ばれて、広間から去った後の…第一声がコレで有った。
王子は一言。
「はい」
「そうだな、そうでなくてはならん。だが……」
王の眸には絶望と哀しみと希望が有った。
複雑に絡み合う感情を抑えて、王は告げた。

「行くがよい。クルトの名誉の為に。そなたの誇りの為に。そして、彼の姫、美の女神の娘たる硝紫黎蘭花姫の為に！？」

仕来たり通りに、口上を述べ、右手にて指し示す。東の方角を。
ヒラリスも仕来たりに従って礼を取り、姫君救出の旅に出る。
ショウシレイランカ姫、５つの名を正式に呼ばれる事は滅多に無いが、それでも２つ名で呼べるのは彼女を『持つ』者だけだ。今迄は、彼女の両親。セリカの国王夫妻。　今となってはヒラリス王子のみが許された呼び名。
「はい、必ずや。次にお目にかかる折には、紫蘭姫と共に！」
そして王子は出発したのだ。

魔の森へ。
東の森へ。
黒き王子の治める領地へと、彼は姫君を救出すべく、冒険の旅に出た。

☆☆☆

◆4話◆姫君の本音

☆☆☆

王子が冒険への出発を遂げた頃、黒の王子に掠われた姫はと云うと。

魔法使いの高き塔にてため息をついていた。

窓から月を眺め、彼女は月よりも美しい姿を哀しみに沈ませて……いた訳でもない。

美食もドレスも宝石も、望むだけ出て来る。いや望まずとも、姫君を美しく飾り立て、黒の王子は幸せそうに彼女を見つめる日々である。

心細いかと云うなら、それもない。

「燕夜？燕夜っ」

姫君の声はどんな楽士が出す事も敵わず、どんな音楽よりも美しい。呼ばれた男はふわりと姫の傍らに降り立った。

魔法に慣れた姫は云う。

「退屈だわ。」

素っ気ない口調に声、冷めた眸に表情、掠われた身で、当然と云えば当然だが、姫君は何ら温もりを与える事をしない。

冷ややかに、誇り高く、己を掠って来た魔王を、けれど躊躇なく呼びつけるのだ。

魔王は喜々として従う。

姫から向けられるものならば、冷たい眼差しさえ黒の王子を魅惑

する。

「では音楽でも」
「飽きたわ」
「ならば新しい宝石を」
「宝石で退屈が紛れるとでも？貴方はどこまで莫迦なのかしら？」

柔らかい口調で笑みを含んで紡がれる、姫君の容赦ない言葉も、黒の王子を惹き付ける材料にしかならない。
「わたくしはね、何か面白い、目新しいモノが、欲しいの」
「例えばどんなモノですか？」

当然だが、その質問には冷ややかな眼差しが返される。
黒の王子の名にしおう、闇色の髪と闇色の眸が、白い肌に映える。神秘的で美しい王子。
東国の名を持ち乍ら、黒の色彩は北のもの。そして肌は西と東の融合した、滑らかな陶磁器の白。

年若い娘が、この美々しい若者を前にして、ましてや日々崇められ、こんなにも熱を持った眸で見詰められ、心が動かない訳もない。

紫蘭も結局は初心な姫君だった。例え、相手には決して覚らせなかったとはいえ。打算に依る結婚を、自ら進んで選び取ったとはいえ。そして、此処でも、心に打算がひしめいていたとはいえ、結局は初心な小娘の心を、捨て切る事は出来なかったのだ。

例えば、財産がクルトに匹敵しても、よしんば、勝る事が有っても、西の大国を敵には出来ない。
ヒラリス王子が紫蘭花姫を諦めない限り、紫蘭の立場から黒の王子を選択する事は出来ない。

それでも、夜の眸に凝視られる事を、嬉しいと想う自分に気付いてはいた。

気付いたからと云って、何が出来る訳でも無い。唯こうして…退屈を口実に呼び出したり、悪態をついたりして、振り回してみたりがせいぜいだ。

燕夜はいつも、彼女の為に様々な趣向を用意してくれるので、城に居る時よりも楽しいくらいだった。

楽士を呼んだり。

芸人を呼んだり。

時には、夜の空を燕夜は姫君を抱いて飛んだりもする。

城に居た時よりも、行動には自由が有る。とは云え、城での生活の不自由さは彼女が選択したものだった。

良き姫。素晴らしき姫と呼ばれる為に、その名に傷がつく様な事は避けて通って来たのだ。

穏やかで優しく、思いやり深く、誰より美しい。賢く、誇り高く、近寄り難い程に高貴で、けれど高慢さは露程もなく、見つめるだけで幸せになれる様な、そんな姫。

そんな評判を守っていたのだ。抑圧も半端ない。

沢山の男を袖にはしたが、誰一人として、彼女を悪く云う者は居ない。

確かに彼女は賢明で、必要以上に偉そうな女は敵を作ると知っていた。

特に彼女が慎重に優しさを振り撒いたのが、女性陣相手なのが証

拠のひとつだろう。

男の恨みを捻り潰すより、女を敵にした方が余程体力と根性が必要なのは当然と云うものだ。

それでも彼女は楽しかった。敵を避け、味方を作り、人を操り、政治のゲームに興じる事が、多分何より彼女を楽しませていたのだ。

夜会の席で、さりげなく動かす政治の駒に彼女はゾクゾクする程の快楽を覚えた。そして、彼女のその性質――勿論、性格では無い――の一端を知る王と王妃は、彼女をとても頼もしく思っていたのだ。その国王夫妻にさえ、彼女は本音で接して居たとは云えない。

だから彼女が、自らの本音を曝し、その性格を顕らかにしたのはこの塔に来て初めての事でも有った。

長い間被って来た仮面を外す事は、例え望んで演じて来たとは云え、一種の爽快さを彼女に感じさせたが、それは当然の事だったかも知れない。

彼女の企み好きな性質は、一介の村娘に生まれたとしても、平凡な一生に幸せを感じ取る事は難しかっただろうが、それでも娘らしい恋心に無縁と云う訳でも無かったのだから。それは結婚相手の容色に、必要以上にこだわる事からも知れる。

退屈だと云えば彼は来る。いや、名を呼ぶだけで充分なのだろうが、彼女は理由が欲しかった。

云い訳、と呼ぶべきだろうか。

だが、そんな自衛の手段よりも、自分を喜ばせる為に懸命な彼を見るのが嬉しくてたまらない。

何とも業だなあと思いつつも、姫君は冷ややかに彼を見遣る。
その美貌に、熱い眼差しに惹かれ乍らも、それを表現する事が許されない。
自分の立場を生まれて初めて腹立たしいと感じた。

「それを考えるのが、貴方の役目だと思ったけれど…役立たずにも程が有るのでは無くて？」
「申し訳ございません、姫君。例えばセリカの城で、どんな事が貴女の楽しみだったか、どうか愚かな私に、お教え願えませんか？」
悩ましくも夜の眸が煌めき、怯みそうになるのをグッと堪えた姫君である。
くっ、と喉を反らし、自然に、冷ややかに、腰を低くした黒の王子を見下して、仕方ないわねと言葉を綴る。

「そうね、夜会が好きだったわ。城ではそれが1番楽しみだったかしら。」
正確には巧妙に政治的手腕を発揮するのが、彼女に快い緊張感と満足感を与えていた。
それは普段の生活でもそうだったが、決して覚られずに立ち回る事が、逆に彼女の心を解放するのだ。
「陰謀と打算。欲に満ちた罠。」
ゆったりと笑みを浮かべ乍ら、それらが今迄通り愉しませてくれるかは疑問だが、と彼女は思った。
勿論、それらの政治ゲームに対する気持ちを霞ませたのは、この美しい黒の王子に出逢った所為に外ならない。

「貴方は楽しくなかったの？」
「そう…ですね。楽しくなかったと云えば、嘘になる。けれど、そんなものに構けていたから、私は…大切な家族を失った。」
そう云って燕夜は淋しい笑みを浮かべた。

静かに穏やかに微笑み乍ら、彼の眸には空虚な色が有った。
殊更に哀しみや苦悩を見せる事もせず、だからこそ見る者を切なくさせる色彩だった。

「梨那季亜さま、と云ったかしら?弟君は。3代前の主の、妾腹の王子でしたわね。お祖父さまは、貴方の大切な家族には含まれなかったの?」
「景影か。いや。愛しい弟だったのは確かだ。けれど、季亜は誰より大切だった。あれが死んでから、私は自分の罪に気付いたのですよ。」
祖父の兄である美しい王子の哀しみに、紫蘭姫は首を傾げた。自嘲さえ出来ない程の罪が、燕夜に有るとは思えなかったのだ。

「どんな罪ですの?」
「誰も、……妻も、両親も、弟達も。誰の事も、本当には愛さなかった罪です。」
「……でも、貴方は梨那季亜さまを愛されたのではなくて?それこそ、王位を継ぐ立場を捨てて、此処にお篭りになった。」

誰よりも、そう、歴代の王の誰よりも素晴らしい王になると謳われた男。なのに弟の為に、その美貌と才を隠したのでは無かったか。

「あれの事さえも、本当には愛さなかった。それに気付いて、初めて愛しかけて、余りの遅さに……私は自らを棄てたのですよ。」
「燕夜…」

時を留めた王子の嘆きは、素直に哀しむ事も出来ない程、深く捻れている。
梨燕紫夜蘭。リエンシャランと云う名の、セリカの伝説の人物は、こんな所で、別の伝説になって居た。

黒の王子。魔王と呼ばれる男として。

「何だかわからないけれど、どうでも良いわ。」

彼女は色々と云いたい事をグッと堪え、努めて詰まらなそうに、あっさりと、云った。

過去より、現在や未来が良い。この人の哀しみより笑顔が良いと、紫蘭は思った。同じ名を持つ男に――この男の名を貰ったのだから当然の事だが――、初めて愛を教えたのが自分だと云うなら、彼に笑顔を与える事が出来るのも、また己だけだと今の彼女は知っていた。

この数日で知ったのだった。

「そうですね。夜会とはいきませんが、祭が有るようですよ？」

「そう？空から眺めて見たいわ。散策に出ましょう。」

「御意のままに、美しい姫君。」

白い手に口付けて、夜の眸が熱を帯びる。

愛さなかった弟に、愛してくれた弟に、孫として彼女が産まれて来たと知った時、彼は何を思ったろう？

何気なく水鏡に映し出した祖国の地で、少女は美しく賢く育った。そして、その行動が自分に似ていると知った時には、既に誰よりも深く愛していた。

誰にも渡したくないと思った彼は、己と同じセリカの王族としての価値観を持つ少女が、何処の国を選ぶかを知っていた。

きっと、と、思い。

クルトの国に至る道に、罠を、仕掛けたのだ。

自分に似ていて、けれど自分に無い、大切な何かを持っている姫。
彼女を掠って来た時に、彼は彼女の為なら死んでも良いと、そんな事を思ったのだ。死とは無縁の彼が、である。
初めての恋は、けれど多難を極めていた。
それでも、死んでも良い等と考える程に、死にたくなくなったのなら、いつか幸せを求めたりも、するように、なるかも知れない。
少なくとも、この後ろ向きな思考に非常に立腹している前向きな姫君が、今は傍に居るのだから。

☆☆☆

◆5話◆王子の錯覚

☆☆☆

紫蘭姫の絵姿を目にした時、ヒラリスは「何と美しい」と思いはしたが、多大な期待は抱かなかった。

南のカテアの国の姫と東国セリカの紫蘭姫、その二人が、国を越えて有名な美姫として謳われている。

二人の絵姿は同等に美しく、同じくらい目を惹いた。

だが、絵はより美しく描かれるモノだったし、パセクの姫の倣いもある。

あの日迄、セリカ、パセク、カテアの三国の姫達は王子達の憧れの的だった。

同じくらい美しい姫君達の、それぞれ違う種類の魅力に、王子達は誰が彼女達を娶る事になるのか、その心を手中にするのかと、浮き立つような噂話に興じたりもしたのだ。

実際に目にしないと、信じられない。と云う、当たり前の事を学んだ事件である。

カテアの姫は美しかった。絵姿に勝りはしないが、詐欺と云う程でもない。カテアなら良いがパセクだと困る。絵姿の半分も美しくないパセクの姫。

美しくない…忌憚なく云うならば、寧ろ醜女と呼ぶべき女。

容色に、そこ迄こだわる気持ちは、ヒラリスには無かったのだ……あの日迄は。

「我恵那王子の二の舞は、踏みたくないからなあ。」

パセクの姫の婚約者だった、東国の王子を思い出し、ヒラリスは何と、紫蘭姫の美貌が如何程かと、調査の旅に出たのである。

セリカとカテアならセリカの方が国の文化度は名高いが、カテア一国として見るなら、そこも充分に芸術の国だった。それならば姫を見比べたいのが人情と云うものだろう。

カテアの姫には彼の国の夜会で出逢った事があるので、問題はセリカの姫だった。同じ東の国の癖に、ヒラリスの友人である我恵那王子は彼女に逢った事がないと聞くが、自分は是非とも逢いたい。

いや、見たいのだ。と、決心を胸に刻んで旅に出た彼である。

「そして垣間見たんだ、あの方を…」

ヒラリスは東の森へ至る道中に、想いを巡らし熱っぽく思い出していた。

忍び込んだ城の庭園は、見つかれば危いが、美しいものだった。流石に名高いセリカだと、芸術の国をそれだけで納得させる庭を歩きつつ考えていた。

ますます、姫君には美しくあって欲しい。いや、この際贅沢は云わない。人並みな美人で充分だ。カテアの姫ほどの美貌など無くとも構わないから、好みの範疇に収まってくれと願ったのだ。

相手の美しさは我が子の美しさに繋がり、我が子の美はそのまま政治の道具にもなるのだから、彼の考えは唯、自分の為と云う訳ではない。

勿論美しい女性は好きだが、それだけで無い事も確かなのだ。

「まぁ、ダメよ。帰ってらっしゃい。エクゥ…エクエちゃん…」

白い猫を呼ぶ少女の声は、細く、銀の月のように美しかった。
冬の夜の様に透明で、春のように柔らかだった。
ヒラリスはその声に凍りつき、次の瞬間、その姿に更に凍った。

その声にはその姿しか有り得ぬと云うくらいに、綺麗な、見た事もないくらいに綺麗な少女だったからである。
一瞬にして魅せられたと云っても良いだろう。
東国特有の銀の髪は青のグラデーションが懸かっていた。青と碧と銀の髪。1番強い色はやはり碧だったろう。眸はこれまた東国以外には捜す事も困難な金銀妖瞳。その中でも珍しい、紅玉と紫玉の組み合わせだった。
彼はその時にセリカの姫を紫蘭と呼ぶ事に決めたのだ。
美しい姫。絵姿の倍、いや絵など彼女の素晴らしさの十分の一も描けてはいない。その絵の半分でも美しい女性であって欲しい、と願った結果がそれなのだから、彼が恋に落ちたのは当然と云えるだろう。

熱狂した、と云っても良い。
ただし、それは後ろめたさを隠す為、と云う要因を多分に含んだ恋の病だった。

東の名は理解は難しいが神秘的で美しい。紫蘭がまさしく紫蘭の花を顕し、夜明けと硝子を意味する名前だと教わった。
勿論、夫となれば、彼女を二つの名で呼ぶ事が許されるのは自分だけなのだ。硝子の花で硝花も良い、蘭の花も同様に美しい。姫の両親が呼ぶその名も綺麗だと思う。この、二つの名を呼ぶ事を許される、等と云う雅やかな風習がまた素晴らしい。
クルトの王子の「持ち物」にセリカの姫君がおさまるのだ…と、あからさまな言葉にするならば、そういう所有欲、支配欲を、満足

させる事実なのだ。
この美しい名前に相応しい見目が有るかなと、意地の悪い事を考えたのも確かだった。
無意識の支配欲は、けれど姫君を目にした事で微妙に形を変えた。元々が素直な性質を持つヒラリスだから、そのまま恋うる心に置き換えて、歪む間もなく情熱の中に落として燃やした。

「そして僕はあの方を守る事を誓った」
走り出て、ひざまずいて剣に誓いたかった。彼女の手に剣を預け、その前に命を曝したかった。
誓いを述べて、許すと、彼女の云って欲しかった。共に誓いの儀式をしたかったが、勿論走り出たりはしなかった。流石にその程度の分別は残っていたので、心に一人誓っただけだ。だが儀式なしでも充分真剣な誓いだったのだ。

だからこそ、今回も旅に出て来たのである。
自分や国の名誉も大事だが、彼女への愛以上に重いものが有るだろうか？とヒラリスは思った。
立派に恋狂いの若者である。
まさか恋する姫君が、魔王に心を移しているなどと彼には想像も出来ず、心を痛める想像の翼が向かうのは、彼女が如何に心細い気持ちだろうか…どんなにか苦しんでいるだろうか、等と美化された繊細な姫君の姿ばかりである。

「姫君は僕を待っているだろう」
確かに待っていた。
「早く救われたいと、願っていらっしゃる事だろう…」
救いも、求めてはいただろう。だがヒラリスの恋に眩んだ眸に映し出される姿とは、些か違ったかも知れない。

彼がそれを知らないのは、彼の幸せに一役買っていた。いや、それを知る事は、彼を一転して不幸にさえしただろう。
しかし、彼はそれを知らず。だから、こうして旅を続ける。

正式な旅ではないから、そして、唯のお忍びでも無い故に、街路は使えず慣れぬ悪路を進んだ。
姫君の為にと、追いはぎや強盗も斬り伏せ、そこに至る道を塞ぐ、悪人達の巣も潰さなければならなかった。
こうして時に各国の王子達が、冒険の旅に出るお陰で、悪人達の数を広めずにいられるのだ。
冒険の失敗も念頭に置いて、秘密裏に事が進められるのも、もしかして民にとっては都合が良い事だろう。
勝手に秘密に行く為に、平和な街路を避けて、悪路を進む。悪人達の潜伏する人の通わぬ道を切り開いてくれるのだから。
そして今日も彼は戦う。
自分を愛さぬ姫の為に。
誰より愛する、姫の為に。

☆☆☆

◆6話◆掠われた姫君の日常

☆☆☆

「紫黎花、我が姫。今日は貴女の名を飾る花を手に入れて参りましたよ。」

「まあ、この紫蘭は…」

この星のものでは無いだろう。

「女神の生まれた星にある花が、元々の由来と云いますからね。」

この世界のものでさえ無かった。

紫蘭は複雑な気持ちで微笑み、小さくため息をついた。

それでも、この星の花とは違い、小振りな紫の花に和む。端正された大輪も良いが、この花は野趣を含み素朴で可愛いらしい。濃い紫の大量の花束に、どれだけ摘んだのかと笑いも零れる。

自分の為に揃えられた花が嬉しくない訳がない。大多数の女がそうで有る様に、紫蘭もまた花を贈られる事が好きだった。

「貴女と美しさを競う事は叶わなくとも、貴女を飾る事ならば、この花にも出来るでしょう。」

そう云って、彼女に花を捧げて跪く。

傅(かしず)れ、手に口付けを許し乍ら、彼女は泣きたくなる。

彼はこれ以上、彼女に近寄る事をしない。愛していると云い、激しく深い恋を眸に顕して、ただ視つめるだけ。

言葉と、言葉以上の眼差しと、たまに…そっと白い手に口付けるだけ。

勿論。

それ以上の事を望まれても困る。最初に拒んだのは紫蘭だし、ま

た今求められても拒むだろうが、だからと云って、嫌だと思っている訳でもない。
女心は複雑で、彼女の立場が尚一層それを深める。
「クルトの王子が、三弥山まで来ましたよ。あそこの盗賊に襲われて負傷したようです。」
優しい声がうっとりと、彼女を視つめたまま告げる。
穏やかに。
静かに。
全然違う話題なら似合うかも知れない。
もっと平和な、優しい声が似合う話題は、いくらでも有る筈だ。
けれど、優しい風情に混乱を覚えるその話が、燕夜の一番口にする話題で、紫蘭は気分が悪くなった。
燕夜を残酷だと思う訳でも無く。ただ、己の罪を自覚する。
「大丈夫ですよ。ちゃんと逃げ延びて、手当てもしたようです。」
穏やかに残念だと続け、そんな事を云いつつも紫蘭の顔色を心配そうに窺う。
的外れな心配をして、彼女を喜ばせるつもりの情報を告げた。
「十日もすれば来るでしょうね。彼は、貴女に熱烈な恋をしているようだ。」
女を切なくさせるような微笑は、紫蘭のお気に入りの表情のひとつだったが、彼女は微かに頬の辺りを緊張させて、首を振った。
「一人にして。」
「……御心のままに。」
彼の不在の空間で、彼女はまた首を振った。
ゆっくりと、左右に振って、泣きそうな表情をした。
呼ばない限り、彼はこの部屋を観ない。声を掛けてから現れるの

もその為だ。
偏執じみた執着を見せ乍ら、珍しいくらいに礼儀正しい紳士で、どうしたら彼を嫌えるのか教えて欲しいと紫蘭は思う。

感情を隠せないなんて、彼女にはついぞ覚えが無かった。
今迄、自ら計算して零す以外に、心を曝した事など無い。
なのに、誰も見てはいないからとは云え、今…涙を堪え、せき止める事の出来ない感情に振り回されている。
紫蘭は叫び出したいような気持ちを持て余した。

もし、燕夜が彼女の様子を目にしたら、また、哀しく嗤うのだろうか。
ヒラリスの為だと誤解して、自らを嘲笑うのかも知れない。
事実は燕夜の想像を超える。
ヒラリスが来ると知った時、無論、来るのは知っていたし、早い到着を祈ってもいた。燕夜からも折りにふれ、ヒラリスの道程を報告されていた。
だから、別段、驚くには値しないのだ。
本来なら。

なのに先刻、そんなにも近く迄来ているのか…と衝撃を受け、更に、そんな事でショックを受ける自分自身に愕然としたのだ。

早く…来て欲しいと願っていた。
早く、来てくれないと…自分の心が解らなくなるから、いや、そんなものは本当は解っていたが、せめて、理性が保てる内に来て欲しい…と、彼女は願ったのだ。

救って欲しいと願った。
国も、何もかも。

総てを、どうでも良い……と、うっかり考えてしまうような、そんな自分の感情から、助け上げて欲しい。そう彼女は願った。

想いを殺して、何も無かった振りで、嫁げると思った。

時に胸が痛んでも、狡かった自分を懐かしむ未来が待つと信じた。

恋など錯覚に過ぎず、ならば夫となる人に、上手に恋をして、愛されるように立ち回れば、それが一番幸せな筈では無いか？

燕夜なんか。何故愛したりしなければならないのだろう？

ヒラリスの行程に、来るな、と念じた。

早く来て、助けてと願った。

誰も来るなと祈った。

祈る自分を紫蘭は自覚して、けれど己の立場もまた…よく弁えていた。

政治のゲームはもはやどうでも良い――何より彼女を楽しませたのに――が、国の平和と安全をどうでも良いとは云えない。

そして、彼女の貞節が破られる事は、セリカとクルトが争う事でもあった。

例えば、南の国の姫ならば、体をひらかれる事が、貞節の終わりだ。男達の考えもそうで、紫蘭には理解出来ない。

ならば心で誰かを愛しても、体さえ触れなければ貞節は守られるのか？

理屈に合わないと、紫蘭は思う。だから、東と似た考え方を持つ、西に嫁ぐ事にしたのである。

実際、掠われた時には、嫁ぎ先が西で良かったと思った。

けれど今。紫蘭は肌を守り乍ら、心を奪われた。
決して、誰にも覚らせはしないが、確かに紫蘭の貞節は失われたのだ。

南が嫁ぎ先ならと、一瞬とは云え、紫蘭は考えた。
あの国が、例え、一回でも掠われた姫に、敬意をはらわないと知り乍ら、それでも、そんな莫迦な考えを浮かべずにいられなかった。
それ程、彼女は衝撃を受けたのだ。
何よりも、燕夜がヒラリスに自分を渡すかも知れないと、そんな可能性を恐怖した。
そして、それを恐怖する自分自身こそに、彼女は何より怯えたのだ。
紫蘭はけれど、いつまでも怯えるだけでは無い。
毅然と顔を上げた。
あごを引いて、眸を細めた。
決意には一瞬で足りた。

「燕夜。」

どんな囁きにも燕夜は応じる。
黒衣の男は相変わらず美しかった。
誰よりも美しいと彼女は思った。
美は力。美は正しき事象。身についた教えが後押しをする。

「貴方は、わたくしをヒラリス様に渡すの？」

冷ややかに彼女は尋いた。
甘い声が応えたのは、彼女が望んだソレに相違なかった。
「彼は殺します。」
「クルトが攻めてくるわ。」

冷たい声がつまらなそうに云うと、彼は深い静かな笑みを見せた。
相変わらずの淋しい笑みで、何処までも沈みそうな深い色の眸。
それでも、紫蘭を知らぬ頃の、愛する事を知らぬ彼の、空虚な絶望と寂寥感は失くなっているのだ。
彼女は以前の彼を知らないが、その事は知っていた。

「全軍は来ませんよ。例え来ても追い返しますが。」
「全軍相手どれると？」
不信の眸に苦笑が返る。
「私はこれでも魔王ですよ？」
その言葉に、彼女はいたく安堵したのだった。

「私は、けれど…貴方のモノにはならないわ。」
「ええ、それでも。私は貴女と共に居たいのです。」
「愛さないわ。」
「ええ。知っていますよ。」
その笑みは、この上なく優しいものだったが、彼女を泣きたくさせた。
先程以上に、彼女を哀しませ、苦しめた。
そして、それ以上に怒らせた。

嘘付き。知らないわ。貴方は何も知らない。
私が誰を愛するかさえ、あなたは知らない。
そう思って彼女は顔を背けた。
冷淡な振りは必要無かった。
充分に、男に対して反発を覚えていたからだ。

「何処かに行って。しばらく帰ってこないで。」
「はい。姫君。」

何にも知らない。
私の望みも、本当の言葉も、何ひとつ。どうして知らない。彼女は床に、机上の物をたたき付けた。
泪は出ない。
泣きたかったが、泣けはしない。
余りの情けなさに、呆れ果てていたのだ。
あの莫迦が…と紫蘭は思う。
初めて逢った時には、全部解った癖に、と。
内心、叫んで、今度は椅子に手をかける。
叩き壊した。
護身用に好きでもない――と周囲が考えていただけの――剣や体術を習っていたが、熱意はとても役立っていた。彼女は刺繍などより余程、剣の方が好きだったし得意だった。
ヒラリス王子は、彼女のこの姿を見ても、恋の海に溺れたままだろうか？
少なくとも、燕夜ならば、ひとかけらも想いが冷める事はないだろう。
燃える事はあったとしても……である。
何と云っても、彼そっくりの手腕に加えて、彼に無かった「大切な何か」を彼女は持っているのだから。

☆☆☆

◆7話◆王族の色彩

☆☆☆

東の森に至る道程は、ヒラリスにとって、とても長く厳しいものだった。

三弥山で、またもやその辺り一帯の悪人達と戦い、剣を交え、彼は肩を斬られた。

自ら簡単な手当をし、逃れついた洞窟のなか、ヒラリスは体を休めた。

その顔色は酷く悪かったが、彼は諦めない。

瞼を上げたなら、その蒼の眸が情熱を失ってないと知らせるだろう。

美しい王子は、白い肌に焦燥を載せて、それでも絶望する事はなかった。

それは紫蘭への想いもあるだろうが、ヒラリス生来の前向きな明るさがモノを云う。

誇りや名誉も、王子にとって重要な問題だったが、彼女に想いを馳せれば、それらは脳裏から消えた。

自らに暗示をかける様にして、ヒラリスは紫蘭への想いを深める。

無意識に、セリカの魔法に畏怖を抱き、

心に掠めた不遜な感慨を、熱烈な恋で上書きしようとした。

ヒラリスは基本が大らかで明るい性質の男だったから、

そんなきっかけでも捻れる事はなく、
本物以上の愛が育つ筈だった。
何せ、ヒラリス自身は殆ど無自覚だ。

庭園で、美しい姫を見た。
〜力を含む美しさに警戒した〜
その美しさに陶然とした。
警戒心はヒラリスの内心奥深くに沈み、意識したのは綺麗な幻の記憶だけだ。

そもそも、東国の王家は心を操る魔法に強い。
セリカは特に神に愛され――能力に恵まれ――姫の美貌ならば、確実に。
全くチカラを持たない等とは考え難かった。

神司、太宰、王家。

熱い息を吐いたのは、だが、姫への気持ちからではなく傷が熱を持ち始めた故だ。

神司はカンシ、何故かイシとも云われる。

神の歴史を学ぶ時に、真っ先に出て来るのは、やはりセリカだ。
神に1番近い、神司を当たり前の様に産む国。

神の司だ、その『宝』への通詞を行う。
故に人へのそれと画して通司が、この場合は正しい。
小さき門、狭き門を司る存在。

教育係の声を思い出す。神官と、王宮の宰と、何人もの声が、語

る。

イシとは神殿の鍵の管理者と云う意味も有ります。

イは狭き門を表現します。

出納を司った為に混同されたのでしょう。

神司(カンシ)、カムシでも宜しいですが、と教師は云う。

神司のツウジする『宝』は、神の存在です。

お言葉。お声。

その煌びやかな、存在の証を、神の従僕たる人間に届けて下さる、

それが神司です。

だがソレは巫覡の存在とも違う。

何故なら、

巫女や神官は、

神の声を聞く事があっても

人間でしかナイからだ。

人間として生まれ、神に列なる。

ソレが、

神司で有り。

太宰で有り。

王家は、それに膝を付くものでしかない。

神司と太宰の違いは、
統治するか否か…だ。
教師の声が云う。
立場として、どちらが上と云う事は無い。
強いて云うなら、神の寵愛次第とも云うし、その『神次第』とも云う。
些か不遜だが、
と教師は声を低める。
神にも、上下関係が有る。
リア・リルーラを頂点と讃えるのは良い。
ソレは神々が謡う詞(コトバ)だ。
シ・エンを頂点と讃えるのも良い。
リアを例外とすれば、主月神は神々を統べる存在だ。
主月神の下に月神達。勿論、17番目の月女神たるリア・リルーラを除いて、ソレは全くの『事実』である。
単にリアと称えればリア・リルーラの事だが、
単にリーと称しても、リー・シェンを示しはしない。
シ・エン。またはリー・シェンと唱えるのが慣例となっている。

リア・ダ・リアルテ。
女神の中の女神。

男神を呼称するならリーだが、リア以上に名を喚ばぬ様に気遣わねばならぬ神も存在しない所為もある。

他の神々は月神達に仕える。

ギリギリで、大丈夫だ。

だが、リア・リルーラとシ・エン以外の月神の上下やその関係は口にすべきではない。
ましてや、
他の神々の問題となると、
人の世界もかくやと乱れ、
決して、正しい解答など有りはしないのだ。

では先生。
と、ヒラリスは尋ねたものだ。

主月神やリアの寵を得る神司や太宰が居たら、
その人は神さえ憚る存在と云えますか？

教師達は息を呑んだ。

不遜窮まりない、それは言葉で、
言ノ葉に載せた、その事実に寧ろ憚り、
教師達は、教育係の権限をもって、ヒラリスに禊ぎを命じた。

熱の所為か唸され乍ら、ヒラリスはいつしか夢を見ていた。
過去の夢を。
教師の一人は、しかし後に云った。
あれは、不遜では有りますが、事実でも有るでしょう。
二度と口になさらぬよう。
と、飽くまでも慇懃に、命じられもした。
西国は、神の加護が少ないのかとヒラリスは思っていた。
だからこそ、
その光栄以上に恐怖をも知らず。
不遜な念いが生まれたかとも感じた。
王家に生まれて、口に出来ない想念だったが、教師達は、周囲は、
全く逆の事を王子に見ていた。

こんなにも、
神の寵愛を得る王子が
西国に生まれた事が有るだろうか？

その王子は、期待通り、東の姫を娶る。しかも、東の中でも名門
中の名門、王家の中の王家。
惑星フライサ、最古の王朝の直系の媛宮である。
クルトの民の熱狂は如何ばかりか。
その姫が掠われたら、そりゃあ助けない訳にはいかない。

神に愛された美しい媛宮、多分チカラ持つ姫君に、ヒラリスは嫌われる訳にはいかない。

そして、惹かれるに充分な美しい姫君だ。

ヒラリスは無意識に、姫君に対する熱狂的な恋慕を己に課した。

枷として心を縛り、その打算は奥底に沈め鍵をかける。

媛宮が心を読むならば、もっと、深く、甘く、優しい、

恋を、愛を、育て上げないと――――

幸い。

ヒラリスは恋を知らなかった。

今までに一番衝撃を受けたのが、

外ならぬ紫蘭姫相手だったから、

擬態はきっと、

本物の恋になる。

筈。

だった。

世の中は、

そんなに上手く行かないと、

神の寵愛をうけたヒラリスは知らなかった。

だが、

此処に、

神の寵愛は錯綜する。

ヒラリスの夢の中で、
教師の声が云う。

気まぐれに東の魔王と称しても、あちらの太宰であるには違い有りません。

あのお方こそが、主月神に任じられた東国全ての王であり、
リアのご寵愛は、なんとヒトの王子で在った頃から変わらぬものと云います。

決して、関わってはいけませんよ。

東是王――トウゼオウ――。
東の王は是なりと、神が宣告した存在。
東を統べる王。

東国全てが、従う王。

東の森、中兌（あたるだ）の奥に住まいする、
隠遁を気取る王。

いつしか
黒の王子。

東の森と魔王と喚ばれ、自らも称して憚らない。

千年王。
とも、
呼ぶ。
永き時を、

神の代わりに、
東を統治する。

トウゼ王。

梨燕紫夜蘭（リエンシャラン）。

美しい夜の魔王。

普通は、
そんなモノに、
勝てる訳がナイ。

「関わっちゃったよ……先生。」

熱の所為で、常の強気が鳴りを潜めた。

☆☆☆

姫？

覗き込む眸の色はセリカの王族の金銀妖瞳。
銀と青の髪が月の光を呼び込む。

冷たい手が額の熱を掠う。
熱に浮かされ乍ら、見上げた貌は、

庭園で垣間見た姫よりも硬く冷ややだ。

月よりもなお冷たい美貌。

なんて
綺麗なんだろう。

ヒラリスは手を伸ばす。
届かない月かと思ったら、冷たい髪に指先が触れた。
肌に触れれば温かみがうつる。

綺麗な貌が微かに驚きを示し、眉を寄せた。
我慢出来ずに引き寄せる。
触れた唇は、
すぐに逃げると思ったが。
不意に
強く求められた。

唇を吸いあげ、
舌を絡め、
唾液を交換し、

ヒラリスは、自分が一体何の夢を見ているかも解らなくなる。

息が苦しくて逃れた。　追いかけて来て、舌を吸われ相手の口中に引き込まれ、歯をたてられた。
欲望を刺激され、ヒラリスも積極的に応える。角度を変え深く口付ける。上唇を軽くはむ様にして、舐めて、吸って。
口腔内の快楽が、下半身にも熱を与える。

「はっ……？」

ヒラリスを押さえ付けるようにしていた影が

唐突に離れた。
直前迄、強く求められていたのに。
熱を分け合い、
喉を吸われ、
白い手に肌をまさぐられ……。

姫……は、そんな事は、しない。
ぼんやりと、思って。
けれど、やっぱり離れた熱が恋しいような、
そんな気がして、
混乱したまま、意識を手放した。

別の熱が、取って代わり気付かなかった。
ヒラリスの、
傷からもたらされた熱は下がっていた。
深く裂かれた、怪我そのものも、
月の光の下で、
痕を消していた。

☆☆☆

前日は、痛みに呻いた。

今現在、傷は何処にも無い。

前日は、熱に喘いだ。
今、スッキリと爽やかだ。

あれは、二日で治る感じでは無かったなあ、
とヒラリスは独語する。

これは最早死ぬのかと、半ば覚悟した頃に……
救けは来た。

神の、寵愛を湛えた姿で。

西にはチカラを持つ者が少ない。
だから、多少、戸惑いはするが。

このチカラが、神の加護なのは解る。
美しい、青年が、傍に居て。
そりゃあチカラの一つや二つもつだろう美貌で、

明らかに、
セリカの血筋だった。

眠る前に気付いていた筈だが、
眠りに落ちる前より、
意識してしまうのは何故だろう。

傷の所為で高熱を出した。

そこに、

顕れたのが彼である。
その美貌は単なる民とも思えず、
それ以前に、
『白』の住人と知り。
女神の、お膝元。
疑うのも、不遜。
熱に浮かされても、
ヒラリスは冷静に受け入れた。
その美しい同行者を。
身分的に、受け入れざるを得なかった。
とも云う。
熱の所為か、記憶は、所々曖昧だ。
それでも、とヒラリスは思う。
大事な事は、覚えている筈だ。
その時も、
ヒラリスはちゃんと、
自分が何と云ったかを覚えている。
「ではどうか、私に対して先程のような言葉を用いられません様。
立場がなくなってしまいます。」

なくなるのは勿論ヒラリスの……だ。

白の塔で白の位(くらい)を持つ相手に対して、
それは不遜と斬り棄てられても仕方ない態度だった。

当然、美貌の青年が、慇懃な挙措に騙される筈もないと気付いて、
なお発言するのがヒラリスなのである。

☆
☆
☆

◆7話◆王族の色彩（後書き）

やっと、神司（カンシ）と太宰（タイサイ）の説明出せました。
燕夜の立場と。
同行者も。
同行者は名前が出せてナイ事に気付き、見直しましたが、捩込めるか悩み中です。

全部、頭の中では終わって、新しい物語が始まってますのに……
もどかしいですね。

神司は造語、太宰は…地球とは大分違いますねｗｗ
仕える相手が帝ではなく神なので、まんま王と云う呼称に。

イシは割と、まんまな説明ですが、そうやって明らかな語源や燕夜が採取した花などに、地球匂わせてますが。

この話には地球は全く出て来ません。

思わせぶりでゴメンなさいｍ（．＿．）ｍ

これから、燕夜の過去…リナキアごめんね事件とか、
砂久弥とヒラリスの旅路とか、
女神がアチコチ出没したりとか、

やっと、具体的に話の骨格が。

読んで下さる方に、過去と現在が混乱して判別付け難い……等と云われぬ様に、落ち着いて書きたく思います。

来月から2ヶ月間は土日祝日がお休みなので、更新は休日か、明けた夜がメインになるかと存じます。

次回は11月にお会いしたいです。

お付き合いの程、宜しくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6208x/

～猫被り姫に魔王退治の王子様～

2011年10月26日03時10分発行